

## 人生のどん底で見た夢

[聖書]創世記28章10～22章

ヤコブはベエル・シェバを立ってハランへ向かった。とある場所にきたとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。見よ、主が傍らに立って言われた。「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」

ヤコブは眠りから覚めて言った。「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」そして、恐れおののいて言った。「ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立て、先端に油を注いで、その場所をベテル（神の家）と名付けた。ちなみに、その町の名はかつてルズと呼ばれていた。

ヤコブはまた、誓願を立てて言った。「神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、わたしが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます。」

### [序]アフガンの悲劇

アフガニスタン東部でNGOペシャワール会の農業支援活動に従事していた伊藤和也さん(31才)が26日朝、拉致されました。大勢の村民も参加した救出活動も空しく、遺体で発見されました。本当に残念なニュースです。ペシャワール会はパキスタンの西部の町ペシャワールで医療活動を行っている中村哲さんを支援するために83年に誕生しました。91年にアフガン国内にも診療所を開設し、2000年に大干ばつが起きて以来、農民たちのために1500の井戸を掘り、農業用水路を13キロ造りました。中村さんはバプテスト教会の信者です。シンガポール日本語教会では、クリスマス礼拝献金を毎年ペシャワール会に献げていました。

伊藤さんは静岡県の農業高校を卒業し、生甲斐のある仕事を求めている時に、アフガニスタンの農業支援という言葉に強い関心を抱くようになり、もともと農業国であったアフガニスタンを本来あるべき緑豊かな国に戻す手伝いをしたいと志願し、26才の冬に現地に赴きました。それから4年8ヶ月、言葉を覚えて村人たちと溶け込み、信頼を得て農業指導に当たっていたそうです。「子供たちが将来、食料のことで困らない環境に少しでも近づけるよう力になれば」という志の持ち主でした。惜しい人を失いました。残念です。それにしてもこのように大地に根を下ろして働く人たちを、拉致殺害して自己主張していく人たちは、決して愛国者ではありませんね。その心は、彼らが住んでい

る岩石が転がる荒れた山地そのものの荒涼とした状態なのでしょう。悲しいことです。

### [1]どん底の夜に

さて北京オリンピックで水泳平泳ぎ100mと200mに、自らの公約通り見事に二連覇して、一躍ヒーローになった北島康介選手(25才)について、彼を育てた平井コーチがこんなことを語っていました。「水泳だけの才能なら、康介より上の選手はいる。でも康介は夢を本気で信じ続けることができるんだ」。夢を本気で信じ続けて栄冠を得た。示唆に富む言葉ですね。

7月から始まった創世記の学びも、アブラハム、イサクに続いて三代目のヤコブに進みました。そのヤコブが素晴らしい夢を見たのです。我が家の寝心地のよいベットの中でではありません。伊藤さんが殺害されたアフガンの風土をTVで見ましたが、ヤコブが野宿したのもこんな荒涼とした地ではなかったかと想像しました。彼は石を一つとって枕とし、地面に横たわって寝たのです。テントもマットもなく、そばに居てくれる従者もない。何もない。全く孤立無援な状態でした。身の危険に怯えて、どんなに心細かったことでしょう。

ヤコブは偉大な信仰の父アブラハムを祖父に持ち、その秘蔵息子イサクの息子として、母親の厚い庇護のもとに、何不自由しない生活を送って来た男です。それが年老いた父イサクが、家督を双子の兄エサウに譲ろうとしたので、母リベカの強い指示に従い、変装してエサウになりすまし、目が見えなくなった父を騙して、家督を継ぐ祝福の祈りを横取りしたのです。出し抜かれたエサウは、ヤコブを殺す決意を固めました。母リベカはヤコブを800キロ離れた自分の実家に逃避させなければならなくなりました。

こうして独り旅を始めたヤコブは、家から80キロ程の地で石を枕に、地べたに横になり、一夜を明かした時のことでした。「お前は本当にエサウなのか」と目の見えない父は幾度も念を押しました。それを神さまの名前まで口にして、嘘をつき通して騙しぬいたのですから、この惨めな境遇は、彼のあくどい所業の当然の報いです。まさに自業自得です。誰をうらむことも出来ません。これからどんな人生が待ち受けているのでしょうか。

ところがどん底の夜に、彼は素晴らしい夢を見たのです。天に達する階段が地にまで伸びてきて、神の御使いたちが上ったり下ったりしています。そして神さまが彼の傍らに立って、声をかけて下さいました。「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」

ヤコブが横たわっている地と神さまが居られる天とが、階段で通じていて、天使が上り下りしています。すなわちヤコブは天と交流できる通路を持っているのです。それは祈りの通路です。彼の

祈りを天使が携えて神さまに届けてくれ、神さまの答を携えて、下ってきてくれる祈りの階段です。恐らくヤコブは、初めて立たされた孤立無援の状況で、必死に祈ったのではないのでしょうか。祈って祈って祈っているうちに、神さまが彼の傍らに立って、静かに語りかけて下さる霊的体験を味わったのでした。

## [2]揺るがない神の愛

神さまは先ずご自分を、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主であると名乗られました。太陽を神さまとして拝む人々があります。火を神さまとして拝む人々もいます。その他、海や山や大きな木や岩が超越的な力を持つ神さまとして拝まれます。ところが神さまはヤコブに、彼の祖父や父が生涯かけて信じた神、彼らの人格形成に深い影響を及ぼし、祝福して下さった神だと名乗られました。神さまは人格を持つ私たちに、言葉をもって語りかけ、人格的に交わって下さるお方なのです。

そしてヤコブが今たった一人で身を横たえているこの土地は、神さまがアブラハム、イサクに「あなたの子孫に与える」と約束なさったのと同じ土地であり、その約束はこんなヤコブにも受け継がせていく祝福であると、確認して下さったのでした。そればかりではありません。「あなたがどこへ行ってもあなたと共にいて、あなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る」。「わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」とおっしゃって下さったのでした。何とねんごろな言葉でしょうか。

父を欺き、兄を出し抜いて家に居れなくなり、荒野に独り野宿しなければならなくなったヤコブです。神さまから見捨てられて当然の罪を犯した男です。勝ち組から転落した哀れな負け組です。ところが神さまは、そのことを一言も咎めておられません。アブラハム、イサク同様に祝福を受け継ぐ者として、約束を果たすまで決して見捨てないと、語りかけて下さったのでした。これは驚くべきことです。

とんでもない悪を行った者を一言も叱らずに、「私はお前と共にいる。お前がどこへ行こうとも守る。決して見捨てない。必ずここに連れ帰る」と約束してくれる親が居るのでしょうか。こんな連れ合いがいるのでしょうか。また上役が、友人が居るのでしょうか？ しかしアブラハムを選んで導き出し、イサクに約束の祝福を受け継がせた神さまが、三代目のヤコブにも、ご自分がこのような神なのだとはっきりとお示しになったのでした。神さまがこのように揺るがない愛の神さまであることを、私たちはよくよく心に刻んでおかなければなりません。

## [結] 夢を夢で終わらせない

「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった」。日本には「正直の頭に神宿る」という諺があります。正直な人には、必ず神の加護があるものだという教えです。これが私たちの社会の常識です。ですからヤコブにしても、こんな嘘つきの自分の傍らに神さまが立って下さって、こんなに優しく、豊かな恵みを約束して下さるなど、思いもよりませんでした。だから恐れおののきました。

そうです。神さまが居てくださらない場所など、この世界にはないのです。どんな人の傍らにも神さまは立って下さるのです。神さまがいらっしゃらないのではない。私たちがそれに気がつかないだけなのです。ヤコブは惨めな状態の中で、心を注いで祈りました。そして傍らに立ち、語りかけてくださる神さまを見つけたのでした。私たちもいざという時に、差し伸べてくださっている神さまの手に、我が身を委ねる信仰を持っていたいものです。

「これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ」。ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立て、先端に油を注いで、その場所をベテル(神の家)と名付けました。夢は通常目が覚めると記憶に残らないことが多いものです。ですから不確かなもの、はかないものの代名詞として使われます。そこでヤコブは、枕にしていた石を立て、油を注いで聖なる記念碑にしました。単なる夢で終わらせないという決意です。祈りによって与えられたこの霊的体験を、人生の新しい出発点にしよう。ここで聞き取った神さまの言葉を土台として、自分の人生を築いていこうと決心したのでした。

ヤコブは「ここは天の門だ」といいました。門は入り口です。門から神の家の中に入って、日々の生活を送らなければなりません。神さまがお言葉通りに、私の旅路を守り、再び無事に父の家に帰らせて下さり、私を神の民の一員として扱ってくださるならば、ここで常に礼拝を守り、神さまから賜る恵みの十分の一を献げる信仰生活を続けると、誓ったのでした。

私たちも、素晴らしい霊的な体験を一時的なもので、終わらせてはなりません。祈りを通して与えられた神さまの約束を本気で信じ続けて、神さまを私の主人とし、神さまに仕える生活を日々に送り、神さまの祝福を自分のものにしていきたいものです。ヤコブが偉かったのは、夢を一夜の夢で終わらせず、石の枕を信仰の基盤として、心の中にしっかりと据えて、信仰生活に励んだことです。ですから後に神さまから、イスラエル(神と人と戦って勝った)という名前を頂いたのでした。

負け組になってしまって絶望し、死の道連れに通行人を無差別に殺しまくった青年が出ました。負け組になることがそれほど恐ろしいことなのでしょうか。ヤコブは策略をめぐらして勝ち組になりました。しかし直ぐ後で、惨めな負け組に転落してしまいました。長い人生、勝ち組と負け組を転々とするのではないのでしょうか。大事なのは神さまの揺るがない大きな愛の語りかけを聞くことです。ヤコブはどん底で素晴らしい夢を見ました。必死に祈ったからです。

どん底に落ちたからこそ、この貴重な霊的体験をすることができたのではないのでしょうか。勝ち組のままだったら、こんな夢を見ることがなかったでしょう。負け組・どん底、悪くありません。恐れる必要はないのです。大切なのはアブラハム、イサク、ヤコブをあのよう導いて祝福して下さった神さまをしっかりと信じて、祈ることです。イサクとリベカは会話の欠けた夫婦になってしまいましたが、それでもヤコブに祈ることを教えていたのです。その祈りのおかげでヤコブは三代目の役割を果たすことができました。イサクとリベカは愚かな罪を犯しましたが、それでも親の第一の務めを、立派に果たしたのでした。私たちもヤコブの見た夢を見る者になりましょう。我が子に天に通じる祈りの階段を

与えましょう。

完